

第20期東京都産業教育審議会  
第4回会議 議事録

平成14年7月29日（月）

午前10時から12時

都庁第二本庁舎31階 特別会議室24

○出席者

伊理 正夫 会長  
郷 宗親 副会長  
浅岡 廣一 委員  
井上 皓司 委員  
石川 史郎 委員  
大森 栄司 委員  
梶谷 正義 委員  
工藤 篤子 委員  
坂野 慎二 委員  
鈴木 正人 委員  
高橋 勝 委員  
中村 義一 委員  
向平 泷 委員  
吉川 昌範 委員  
岩尾 啓一 専門部会委員

## 第20期東京都産業教育審議会 第4回会議次第

- 1 開会
- 2 議事
  - (1) 答申(案)審議
- 3 今後の日程について
- 4 閉会

○事務局 おはようございます。何人かの委員がまだお見えではございませんが、定刻になりましたので第20期東京都産業教育審議会第4回会議並びに第6回の専門部会を合同開催させていただきます。

7月の都の人事異動がございまして、委員に変更がございまして、ご紹介をさせていただきます。7月の都の人事異動がございまして、委員に変更がございまして、ご紹介をさせていただきます。7月の都の人事異動がございまして、委員に変更がございまして、ご紹介をさせていただきます。7月の都の人事異動がございまして、委員に変更がございまして、ご紹介をさせていただきます。

また、本日は小杉委員がご都合によりまして欠席でございます。よろしくお願ひいたしたいと思ひます。

今ご紹介いたしました高橋労働部長、高橋委員がお見えになりましたので、ご紹介させていただきます。

○高橋委員 7月16日付で労働部長を拜命しました高橋でございます。どうぞよろしくお願ひします。

○事務局 それでは、本日の会議でございますが、次第にありますとおりの予定でございます。机の上に配付させていただきました資料の確認をまずお願ひをいたしたいと思ひます。

1枚目が次第でございます。

次が資料1、答申（案）の本文、若干厚いものでございますが、本文でございます。後ほど朗読をさせていただきますと思ひます。

資料2につきましては、今後の日程表でございます。

以上、確認をお願ひしたいと思ひます。よろしいでしょうか。

それでは、伊理会長、会議の進行をよろしくお願ひいたします。

○伊理会長 かしこまりました。それでは、会議次第に従って進めさせていただきますと存じます。よろしくお願ひします。

本日の議事は答申（案）の審議ということになっております。前回と同じなんです、9月の最終答申までの間に審議会として、あるいは専門部会としてお集まりいただくのは、きょうが最後になるのではないかと思います。前回、大体答申の骨組み、骨格については案を提示させていただいて、それについていろいろなご意見を伺い、こういう方針で答申をまとめたらよからうという、その方針の大筋についてはほぼ合意をいただけたのではないかと思います。それに従って、本日、より詳しく文章化した答申というものの案が出ているわけでございます。それをもとにきょうご審議いただいて、その後どういう日程で進めるかについて事務局のほうから腹案をひとつご説明ください。

○事務局 それでは、資料2、右肩に資料2とございます第20期東京都産業教育審議会日程をごらんいただきたいと思います。

今、会長からもありましたけれども、9月に最終答申というふうに考えてございます。本日は答申案の最終調整ということでご意見をいただきたいと思っておりますが、本日以降、きょう時間も限られておりますので、本日以降答申までの間に、さらに細部の調整が必要な場合が考えられますので、その際はメールですとかファクス等で各委員のご意見を集約させていただきたいというふうに考えております。

答申案を事務局がまとめまして、最終的には会長、副会長にご了解をいただくというような形で進めさせていただきたいと思っております。

9月の最終答申前の会合としては、今回が最後というふうに考えておりますので、よろしくお願いをいたしたいと思います。

以上でございます。

○伊理会長 ありがとうございます。そういうことで進めるので、よろしゅうございませうか。それについて、ご同意をいただいおかないとならないと思うのですが。もうあとこういふ会合を2回やれというご意見があれば、それはそれでまた検討させていただきますけれど。

一応事務局案で進めるということによろしゅうございませうか。

(「異議なし」の声あり)

○伊理会長 ありがとうございます。

それでは、議事次第の(1)答申(案)の審議に入りたいと思います。

資料1が、先ほどもちょっと申し上げましたけれど、一応文章化されている答申の(案)ということでございます。先ほど伺ったところでは、一部図が入っていないところもあるけれどということでしたけれども、まあ、かなり完成度は高いのではないかと思います。前回から今回までの間に、いろいろな委員のご意見も伺い、そしてできる限り事務的に反映させてあるようでございます。

それでは、これを事務局のほうからまず読み上げていただいて、ちょっとありますが、読まなくてもいいというふうには、やはり細かな「てにをは」なども問題でしょうから読み上げていただいて、その後でご意見を伺いたいと存じます。

では、事務局のほうでひとつ。あまりゆっくりとでなく……。

(答申(案)読み上げ)

○伊理会長 はい、どうもご苦労さまでした。一応現在のところの答申(案)は以上のとおりでございますが、これからあと40分間ぐらい自由にご意見をいただければと存じます。

そして、その後の予定については、先ほどもございましたが、ご意見の出方によって、また

どうやってまとめていくかについては、最終的にまた日程のご相談もしたいと思います。よろしく申し上げます。

いろいろな方からいろいろなご意見がありましたので、やや書きっぷりがあっち向いたり、こっち向いたりしているところがないわけでもないようですが。

○ 出ていないのに申しわけなかったんですけども、今までの全部の議事録もみんな読ませていただいて、ちょっと素朴な質問——質問じゃなくて、入れたほうがいいんじゃないかという。

まず、デュアルシステムという名前にサブタイトルをつけたほうがいいと思うんですね。つまり、何人かに聞いてみたんですけど、うちの会社の人間に。知っているのは海外に行っている人間、ヨーロッパに行っている人間しか知らないんですよ。ですから、サブタイトルで何かいい日本語の名前をつけて、それで東京版デュアルシステムというのだったらサブタイトルで認識させると。東京版デュアルシステムでもう固定してしまうのであればね。それが1つです。例えば、学び・働きとかね。

○伊理会長 今の件に関しては本文中のどこかにパラフレーズしてあるところがありましたね。デュアルシステム括弧何とか。

○ 新聞や何かに載るときに、それをサブでちょっとつけておかないと、一般の人は読み流しちゃう。それを普及させるためには。だから、一番最初のタイトルの……。高校におけるデュアルシステムの実現、これを読んでもらう……。名は体をあらわすというのをしてほしいということが1つ。

それから、希望的に言います。明確な目的意識というのがあちこちに出てくるんですが、それに対しての説明がどこにもないです。

それからあと、インターンシップとかインターンというのが、もうほんとうに今乱用されていますよね。昔はインターンシップというのはどちらかという実習というような形で、医学部の学生がどちらかというある期間勉強して、それから1年なり2年なり実際の現場でやると。彼らはインターンというふうにいていたわけですね。ですからむしろ、インターンシップでもいいんですが、例えば、ちょっと乱用されているんですが、研修生とかそういうような、企業に派遣するとそれが研修生という名前になる。例えば研修実習生とか、何かそういう表現にしてみると、受け入れ側のほうとしてもただ勉強してくるのではなくて、みずから習うんだという意識が働きますから、そういう言葉を使ったほうが受け入れ側としても真剣に受け入れるのではないかと。つまり、それでもうインターンだと。シップじゃないんですよ。インターンシップというのは一つのあれですからね。彼らはインターンであるというようなイメージで、ちょっと切りかえたほうが、今までの。だから、そういうようなことが1つあります。

それから、企業とのパートナーシップということを盛んに言っているのですが、意味がわかりません。パートナーシップというのはいろいろな意味があって、企業で使っているパートナーシップというのはもっと厳密な、法的な意味でのパートナーシップが多いですから。例えば、アメリカでパートナーシップ組んでやるとなったら、パートナーシップ法に基づいてきちっとやるというふうなことがある。これは辞書を引いても、普通のパートナーシップと、それから法的な意味でのパートナーシップ、2つあります。日本でいうと匿名組合とか、それがパートナーシップなんですけれども。だから、はっきりどういう意味なのかちょっと。一緒にやるということですよ。

それからあと、11ページのところに、生徒像というところに非常に企業にとって、また働いている中で、後でそれこそ研修実習生はレポートや何かを書かなければいけませんね。表現能力が今ものすごく落ちているんです。大学を出てきて、入ってきている子が。だからコミュニケーション能力とか、表現力ががた減りに落ちています。だから何とかこの段階でやっぱり表現能力とか、コミュニケーション能力がなかったら、表現をどうするかは別にして、いくらものづくりができて人と人とのふれあいの中できちんと自分のやっていること、あるいは自分の考えを表現できる人、そういうことをひとつ育ててほしいと。これが今我々の企業どこでも同じ悩みを持っています。ですから、生徒像の中にやはりそういうようなことを入れてほしいなというような。単に技能とか自立、興味・関心はあるのですけれども、やはり外へ行って働かなきゃいけない、対外的な相互関係が出てきますから。それが非常に会社に入ってくると重要だというふうに思っております。

それからあと、17ページのところのカリキュラムの中に、安全教育というのは入れてもらえないんですかね。1年のときでも、2年のときでもいいですね。長期就業訓練であるときに、安全、もうどんなメーカーでも、どこの工場の中に一步入っても、安全教育というのはものすごく厳しい。入るときにまた安全教育を会社側でやらなきゃいけないということになるので、ベーシックな安全教育だけはきちりやっておいてほしいと。

だから、我々が1つの大きな工場を建てるとすると、その工場の全体の安全、むしろ私たちが事故を起こすと、その工場のお得意先の工場の安全性に影響がしてくるわけです。だから、それだけ厳しいわけでありまして、それで特に簡単な傷害とか何とかだったらいいんですけれども、やや重大災害的なこと、骨折したとか何とかになると、これは会社側の、場合によっては送検されますから。保険を掛けていればいいというものではないんですよ。だから、そこら辺は十分認識しておいて、会社側もそれだけの覚悟をしなければいけないわけです。万が一起きた場合には、もうはっきり言って重大災害、死亡もありますけれども、死亡に近い形での長期療養ということになると、やはり担当者は1カ月ぐらい仕事ができないぐらい大変、今、厳しい

です。ですからそういうような、事故の対応等というのは、これは保険を掛ければ済むという  
ものではなくて、やはりこの中に安全教育ということをも1つ入れておいてもらえば、例えば、  
ああ、そこまで考えているかというようなことを企業としては受け入れやすいというふうに私  
は思います。

あと、細かいことたくさんあるんですが、基本的にはこの考え方でぜひ進めていかなければ  
ならない……。

それから、14ページのところです。表1のところに定義があつて、意義があつて、そこ  
のところに「インターンシップより豊富な就業体験により、インターンシップの目的を更に達  
成させる」と。これは上のほうの定義で言っていることを言っているんですかね。デュアルシ  
ステムというのはインターンシップと違うと言っているが、インターンシップの目的を達成  
させるという、何か矛盾的な表現なので、できれば上の定義による目的とかね。二元的な職業  
教育システムですよ。基本的に違うと思うんですよ、従来のインターンシップとは。だか  
ら、この辺はちょっと自己矛盾じゃないかなということ。

それから、雇用者と労働者とどう違うのか、ちょっと私には表現が2つに分かれているので  
わかりません。

それから、あちこちしてすみません。15ページの就業訓練パターンがありますね、ABC  
の。これは3つ考えられるということが書いてありますけれども、これは例としてはですね。  
だからこれらのミックスもあるわけですね。このパターンといたらもうこれしかないという  
ふうに、ちょっととられてしまうので、これらのミックスも考えられる、あるいは例として次  
のパターンがあるというようなことですね。

それから、やはりここで1つ職業観、勤労観の育成の中に、家庭とか何かのことは何も書い  
ていないんですね。やっぱり家庭のことをひとつ、1行か何か入れてもらって、これはまた親  
が関係ないというのがあるので、やっぱり家庭でお父さん、お母さんとか、おじさん、おばさ  
んとか、兄弟とか、この辺の影響というのはすごく大きいと思うんですね。ですから、ちょっ  
と家庭とか、周辺のおじさん、おばさんでも、地域の人でもいいんですね。そういう人  
たちもみんな職業観、勤労観を育てるということを、みんなで盛り上げていかなきゃいかん  
時代に来ていると思うんですね。

すいません、以上です。

○伊理会長 ありがとうございます。大変基本的な問題を随分たくさんご指摘いただきまし  
て、ありがとうございます。

これらの扱いについては、私のほうからちょっと今までの経過も踏まえて二言、三言ご返事  
するというわけでもないんですけども。



○ いや、もう返事要らないです。検討していただければそれで。

○伊理会長 ただ、デュアルシステムという言葉について何かパラフレーズした日本語にしたほうがいいと。私もかな書きのテクニカルタームについては基本的にはいつも反発しているんですけども、そのインターンシップも含めてね。ですけども、この場合のデュアルシステムというのは、諮問のほうデュアルシステムとなっているし、デュアルシステムという、ちょっと一見奇異な表現を使うことによってかえってアピールするという意味でのインパクトを期待してこうなっているのかなと私なんかは感じておりましたけれど、しかし、これはもちろんおっしゃられるように、比較的早いところでデュアルシステムとは何であるかをわかりやすい、あまり長くない日本語でパラフレーズしていくことは、悪いことではないかなとは思いますが。中を見ていくと、それに相当するような日本語が何箇所かにあるんですけども。

○ だから、学ぶことと働くことを融合することなんですよね。学働融合なんてなっちゃうと経済同友会で言っているのと同じになっちゃうから。

○伊理会長 それからインターンについては、確かに日本の中での用語法としては、お医者さんのインターンだけが先走りしてかなり定着していたんですね。おっしゃられるように、昔は、この会合でも第1回目か2回目のときにそんな議論もありましたけれど、昔は実習と言っていたんだよというお話も随分あったんですけども。最近では、どこが言い始めたんですかね、このインターンというのは。一番初めに言い始めたのは。

○ 平成10年ぐらいにその当時の文部省で出しているんです。

○伊理会長 文部省でしたかね。文部省だか、通産省だか、労働省だか知りませんが、そういうところでインターン、インターンと言い出したら、何か、ばかにそれがはやっちゃって、昔の実習とどこが違うの、結局同じじゃないのというようなことで。

○ 5ページにちょっと書いてありますね。

○伊理会長 ということで、使われ始めちゃって。そうですね。企業の方にとってはやはりこれも奇異な用語とお感じになるかもしれないんですけど、こういうことをやっている人にとっては、インターンシップというと、もうそれですべてがわかるという、そんなふうになってしまっているようで。私は昔の大学生でしたから、工場実習というのは非常によくわかった。そのころはインターンなんていう言葉はなかったですけどね。

○ 何で日本語はまずいんですかね。

○伊理会長 全くそのとおりですね。私は全くそれには同感なんですけれど。

○ 括弧して日本語書いておけばいい。

○ ちょっとよろしいですか。私、これ、初めて見ました。17ページ、18ページのこの表を見てみますと、どうもインターンシップというのは日本語で言いますと短期研修、それでデ

ュアルシステムは長期就業訓練と。このキーワードだと思うんですよね、この表の骨子は。

○ そうです、そうです、ここではね。

○ 一方ではまたちょっとあれなのは、3年次のところに「長期就業訓練又は企業就業」というのがまた入ってくるんです。ここがちょっとわからなくなっちゃっているんですが、私は日本語で出すとこれだなと。で、この言葉でいいのかどうかというのは、また。ここにキーワードが出ているんだと私は思うんですよね。

○伊理会長 それでいいんですかね。このインターンとかインターンシップとか書いてあるところを全部それに直しちゃうと、また何を言っているんだかわからなくなっちゃう。ですから、おそらくそれがわかる人たちにとっては、何であるかがわからなくなっちゃう。ですから……。

○ このキーワードをうまく表現しないと。

○伊理会長 ですから、比較的早いころに、ここで言うインターンシップとはこういうものであるということがわかるように、日本語でパラフレーズしておくということを比較的早いところでやっておけばいいんじゃないかなと思いましたということです。

○ すいません、今のことに関連してなんですが、今の17、18のところで、皆さんおそらくひっかかっているらっしゃるので。その表3のほうの位置づけの短期研修、長期就業訓練、労働者という位置づけのところと、その中に入っている就業体験という言葉があるんですけども、この就業体験というのが僕は前にちょっと申し上げたときに言いますと、いわゆる企業のやっていることのお試しなんです。これ。お試しと実際のいわゆる訓練というのは、僕は分けるべきだなというふうに考えているんですけども、表現的にそれがわかるような形でやっぱり書いたほうがいいのではないかなという気がします。

○伊理会長 ここにある短期研修と長期就業訓練というのでいいんですね。

○ いや、だからこれが対になる言葉として適切になるかどうかも含めて、もうちょっとお考えいただければと思うんですよね。

○ 日本語をもう少しきちっと定義してほしいね。

○伊理会長 いや、それは一番最後におっしゃった、その……。

○ それで横文字に走っちゃって……。

○伊理会長 要するに表現能力、コミュニケーション能力とをまたみずからにアプライしている話になる。

○ とにかく片仮名が好きだから、日本というのは。で、間違っ使っている。

○伊理会長 私は全く同感なんですけれど、しかし……。

○ また、政府、好きですね、最近。省庁等。

○ ただ、今特にインターンシップについては、従来のいわゆる工場実習とか、あとお医者さんのインターンという言葉とは別に、高校生なり大学生なりのいわゆるお試し型のもの、あるいはちょっとそれに毛が生えたようなものというのを含めて全部使っている形で、非常に広い形で使っていますので、ここでは、ですから基本的には高校生対象ですので、いわばそのお試しの部分についてがインターンシップだという形でどこかで入れておけばいいかと思うんですけど。

○ そうですね。きちっとどこかで、ここではこういう意味だということをしてあげば。

○ ちょっとこのところについて内容なんですけど、インターンシップと長期就業訓練とが同じ企業さんでいくものなのか。そうするとお試しでもないと思うんですよ。だから、これは別の企業でもいいですよという表現がどこにもないので。どうなんですかこれは。

○ インターンシップの単位のところで、たしかどこかで幾つかの業種を経験してみたいなことが書いてありまして。

○ そうするとここは複数の企業さん。長期就業はもう一個にちょこっと、そういう編成なんだ。

○事務局 よろしいですか。今、ご議論いただいておりますインターンシップ、短期の就業体験ということでご説明を18ページのほうでさせていただいているんですが、基本的には中学校を卒業してこの学校に入ってくるわけで、即デュアルシステムに近い企業就業というのは無理だろうということで、1年生相当時には短期の就業訓練ということで、現行の高校でやっておりますインターンシップで、さまざまな企業、さまざまな業種といいますか、経験をする中で、自分の職業観、勤労観を培っていただきたいというようなことで考えております。

それで2年、3年と経るにつれて少しずつご自分の子供の就業体験に基づいた勤労観、就業観が出てきた段階で少しずつ長期の就業訓練というんですか、それを進めていきたい。その部分から、ここで言っているデュアルシステムが始まるのか。最終的には目標とするところの企業就業といいましょうか、という形につなげていきたいと考えております。

○伊理会長 それは多分全体の流れとしては、それは理解できると思うんですけど、どこかにローカルに1社には限らないということが例示してあるといいなというご意見だと思いますが。

○事務局 ちょっとその辺の文面が足りないところがあるのかなと思いますので、それは入れさせていただければと思います。

○ 17ページの2行目のところで、「インターンシップ（6単位）でいくつかの異なる業種での就業体験」云々という文章がありますので、このところでそれが少しわかりやすい形で表現を入れればよくなると思うんです。

○伊理会長 それから、たまたま17ページに来ましたので、今のご指摘の中で安全教育というのがこの科目の中に入っていないのはけしからんという。おそらくこの表は文部省のほうにある科目名から拾ってきて並べてあるんですね。文部省の中ではたしか安全という科目はなかったんじゃないかな。ありましたっけ。

○事務局 教科科目としてはないんです。

○伊理会長 なかったですね。

○事務局 小・中・高等学校とも学習指導要領の総則の中で、学校において健康・安全に関する指導については、学校の教育活動全体を通じて行うものとする。教科科目とか、ホームルームとか、学校行事とか、適宜行うと。もちろん計画的にやるわけですけども。

○伊理会長 ですから、それを踏まえてこの表の中に入れるのは、ちょっと異質なものになってしまうかなと。

○事務局 ただ、こういう特色のある学校ですから、学校設定教科科目等で入れることは可能だと思います。

○ だからこれは、インターンシップとか長期職業訓練とかありますでしょう、単位が。この中に入れればいいんです。それをきちっと認識しておいて、安全は必ずやりなさいよということ。事故対応等とか非常に神経質に書いているわけだから、それは指導的なことでやるとかね。

○伊理会長 いや、その事故に対する対応のようなことを書いてあるところに、生徒に対する教育の中でも安全教育を徹底することと書いておけば、指導要領と平仄は合うんですけどね。

○事務局 ご指摘のとおりです。例えばオリエンテーションであるとか、必ずそれを入れるというようなことはできると思います。

○ それ入れておいたほうがいいね。それやらないと、企業としても来てからまた安全教育やらなきゃいけないと。

○伊理会長 いや、それは安全教育はどこでも、何遍でもやったほうがいいと思いますね。

○ それはそうですよね。だから学校でやっておいてまた来れば、吸収しやすいですね。

○伊理会長 その次もう1つ、非常にテクニカルの話を、私も聞いていておやと思ったんですが、雇用者、労働者、それから被雇用者っていういろいろな単語ありますけれどね。

○ 雇用者でも被雇用者ですかね。

○伊理会長 被雇用者のことですね、これ、雇用者と書いてあるのは、意味は。

○ ええ。労働者、被雇用者。

○伊理会長 労働者というのがいいのか、被雇用者がいいのかよくわかりませんが、その辺もご検討いただければ、何かいい用語ができるのかもしれない。

それから、もう1つ、家庭における教育が大事なんだという話。これは、近ごろの新聞で何

だかんだいろいろなことに関係して指摘されていることではありますが、せっかくここで、この東京都教育委員会といえば関係あるのかな。しかし、少なくともこの産業教育審議会の守備範囲以外のことになるかもしれませんけれど、のこを書いてある場所がありましたね、最後に。東京版デュアルシステムの実現に向けての課題、ここでは何でもかんでも八方破れで関係したことにいちもんつけているわけですから、このところでやはり家庭に関することを入れることは、一向に構わないんじゃないですかね。

○ だから、小・中学生段階から、今はかわいそうなんですよ。我々のときには見られたんですよね、働いている人が。だから、それは今意識的に働いている人のところに連れていかないと、見当たらないというようになってしまいましたね。つまりその人の個人個人のキャラクターとか個性というのがあって、片一方は外的環境とか職場とか、いろいろなそういうふうなことをもった企業があって、それが本人のパーソナリティあるいはそういうようなものとどうやってマッチするかという、ジョイントするのがいわゆるキャリアデザインとも言えるんですけどね、それがぷつぷつ今は切れているわけですよ。ですから、それをやるのはやっぱり小さいときから子供を見ている親とかね。

○伊理会長 そうですね。昔は隣に大工さんがいたり、それから町工場があったり。

○ 22ページあたりに、これはいろいろ中身を論議して、小学校、中学校というところからも大事なんですよということ。

それから、例えば22ページの(2)なんかにも、まさしくその技術・技能を尊ぶ社会気運の醸成ということで、マイスターの問題なんかも含めて書いてあるので。

○ 何でも学校、学校って、学校に押しつけるのはけしからんのでしょうか。

○伊理会長 全くそのとおりです。

○ この社会気運の醸成の中に、当然それは親のあれを見るんだという部分も、そういう思いも含まれているのかなという気がするんですけど。

○ 書かないと親は、私は関係ないという……。

○伊理会長 おそらく皆さんご異論はないと思うんですけども、どういう形でそれを含めるかは。社会気運を醸成せよというところに一文入れるのか、それとももしかしたら新たに1章節立てていうのか。

○ 全くやっていないわけじゃないので。例えば中学1年生ですと、自分の父親だとか、母親の職業を、身近な人の職業を理解すること。2年生になると職場体験ということで、総合的な学習の時間とミックスしてやっているところもありますし。

○伊理会長 お父さんの会社に見学に行くというような。

○ 地域のいろいろなところを出かけていたり。

○ じゃあ、おやじと語らうというやつですね。親がもう少し子供と語らなきゃ。

○ それは必要だと思うんですけども。

○ すいません、よろしいでしょうか。全体として最初からこのシステムでやるというのはもともと趣旨にあったので、これに異論を挟むことはもともと許されていないんですけども、私も会社まで来られて、言わないでくれと言われたから言いませんが、要は、例えば17ページで、「ガイダンス担当教員との面談・カウンセリングを通して、2年生以降の就業訓練先を絞り込んでいく」というふうに、単紙にこれだけ書かれていて、逆に言うと、ここが一番問題なのではないかと。これが今社会機構の中で欠けていると。大学でもインターンシップをやっていますけれど、これは結局のところ大学でインターンシップした会社、例えば石川委員のところに行っても多分その方は厳しい会社には入らないというのが現実でして、要するに初めて職業を見るというのが現実ですよ。それを確かに中学もおやりになっているでしょうけれども、ほんとうの現実からいえば、高校生なんか全く意識もない中で、初めて仕事を見て、これは嫌だと思った人が出てくるのは当たり前だと思うんですよ。これは明らかにみんな見て、ああ、いいなと思って、こうなってこうなって、はい、そして11ページにあるような生徒像ができてきていくぞと、こうなっているわけですけど、そんなわけにはいかないよと。やった人の半分以上が、下手したら8割ぐらいが、こんな、たまらんと感じてきたっておかしくはないんですよ。そのときにどうするかというシステムがここにフォローされていない限り、これは絵にかいた餅だろうと僕は思うんですね。申しわけないですけど。

つまりここが問題で、これをどうやって現場がわかる、社会がわかるカウンセラーがきちっといてフォローするかということが問題になっているわけで、これが社会全体として今ないわけですよ、どの年代においても。これはいいシステムだと思うのであれば、ここにそれをどうにかしてフォローしていないと、ほんとうに申しわけないですけど、絵にかいた餅じゃないかなと。

ごくごくうまくいけばそうでしょうけれど。もちろんその生徒の中で、いい工業学校が選ばれたとして、その生徒は優秀で半分ぐらいがそうなるかもしれませんが、じゃあ地方でもっとそんなことがないところに来たら8割、9割は多分、すげえ仕事って嫌だと。何とかこのまま逃げられないかというのが当たり前だと思うんですね。それをどうフォローするかという、つまり、少なくともシステムだけでもここはないと。これはあくまで、ほとんどそこは逃げているんじゃないのと言われかねないので、できたらここは1ページぐらい割いていただいたほうがいいのではないかなというふうには思いますけどね。

○ キャリアカウンセラーを制度的につくることになりましたね。あれは労働省？

○ 厚生労働省です。

○ 厚生労働省ですね。

○ キャリアコンサルタントといいます。ただ、あれは実をいうと作り方が完全に転職アドバイザーなんです。だから社会構造上の一番問題になっている高齢者、中高年のところをターゲットに。

○ いや、今度特に高校生、違います？

○事務局 都立高校にも、例えば晴海総合高校などにはキャリアカウンセラーという形で、子供たちの興味、関心を図りながら進路相談をしていくと、進路指導をしていくと。

○ あれはもう義務づけられたらいいですよ。

○事務局 そういう専門の教師を配置していることは事実ですね。この趣旨と必ずしもダブるわけじゃありませんけれども。

○ だから、現実ほんとうにそこはお粗末なんです、どこも。

○ だから義務づけないと。

○ だから、そこをシステム化して、きちっと。例えば、じゃあ地域のボランティアを募集して、それを組織化して、それが例えばかくかく何時間は日中、土日のあれは何時間と充てて、そうやってシステムができますよというのが、いわゆるそれはこれからやるというにしても、そういう組織化というかシステムをここである程度提案をしていかないと、ほんとうにそういうのがありますよ、ありますよというだけのことになるのではないかなと。

○ ある県の高校の進路指導の先生が100人集まったときに、今の勤める先というのは経済界、経済ですよ。日経新聞読んでいる人、手を上げてくれといたら、100人のうち2人だけです。

○ そうですよ。僕もあれで行かされて、この間もやりましたけれど、人事制度そのものを知らないですもの。職能資格制度って知ってますかといっても、わからないですもの。

だから、そういう人が申しわけないけれど、それは教育のご専門でいらっしゃるからあれでしょうけれど、逆にこれはそういう、じゃあこれからどうやって給料を上げていくとか、どうやったらステップアップできるのかとか、じゃあ年金はどうなるかというようなことが、やっぱりそういうのが総合した話がないとできないですね、質問が来たときに。

○ だから、子供たちと職業とを結びつける役の進路指導の先生が、そうじゃないんですよ。ないからいかんと言っているんじゃないですよ。そういうのを早く充実させないと。

たまたまカウンセラーを設けるといようなことが厚労省から出ているので、ああもうこれで決まりでよしと。だからこれも生きてくるなと思っていた。

○伊理会長 いわゆる、その、先生というけれど、であるのか、あるいは企業のほうでそういうことにお詳しい方を先生として来ていただくのもいい。

○ そういういろいろな方がいらっしゃるといい、2人ぐらい。

○伊理会長 いろいろなやり方があると思いますけれど、しかし、何か必要だということはここに書いてあるんだから、そこを1ページ書くというのはちょっと大変かもしれないけれど。

○ すいません。今のキャリアカウンセリングですね、厚生労働省。あれは、職業経験のない人に対するカウンセリングじゃなくて、例えば中高年で離職して、特にホワイトカラーですね。ホワイトカラーの場合は資格がはっきりしていないので、例えば職業相談をやっていると、何ができますかと、部長ならできるという話があったぐらいで、何ができると社会的に説明できるあれがないものですから……。

○伊理会長 ここでやっているものとは違うんだということは、皆さんおわかりになっていただけと。

○ 僕が考えるに、例えば地域ごとの学校で、地域のお父さんを含めてボランティアを集めて、その中でやっていくとか、そういうアイデアを盛り込んで一応やっていくのはどうであろうかというようなことぐらいでも入っていないと。

○伊理会長 そうですね。なかなかいいサジェスションだと思いますから、そういうような……。

○ だったらもう、やっぱりそういうカウンセラーを設けなきゃいかんですね。僕はあると思っ

て。  
○ 僕が先ほど言ったのは、この2年と3年で長期就業でも期限はかわるんじゃないとか、そういう意味で先ほど言ったんです。学生さんが1つの企業で2年も3年も気に入れば行くと思うんですけど、半分以上は行かないんじゃないのかなと。

○ これだったらもう就職と変わらないですからね。

○ そのときにはどうするのかというのをこれには書いていない。先ほどそれが言いたかったんです。

○ ちょっとよろしいですか。要するにいいところというか、うまくいった場合にはこうなりますということは、これである程度わかるわけですけども、今岩尾先生おっしゃられたように、うまくいかない場合とか、あるいはここで今のままではちょっとまずいから、足さなきゃいけないところが幾つかあるわけですよ。その部分について、とりわけいわば行政サイドがやるべきことについてのまとめみたいなどころというのが、実はここの中には入っていないんですよ。

逆にそれがないと、あと実際に、例えば財務関係者と予算折衝とかをするとき結構厳しい。だから、今岩尾先生おっしゃっていたのがまさにそうだと思うんですけども、そういったものの提案が要る。



その中で、今話に出ていたアドバイザーみたいなものについては、日本の場合特にこれは欠けていますから、これについてはある程度、これはまさに行政措置で、学校の先生にそれをおつかぶせるのはかなり厳しいものですから、ある程度独立した形で、別ポストの形で用意できるような形の提言が、多分必要になってくると思うんですね。

と同時に、あと、実際に企業に行って、今子供のほうが嫌だといった場合にどうするかというご提案が今岩尾先生のほうからあったんですけども、企業のほうが嫌だと言ったときにどうするんでしょうねというのを、始まる前にお話ししてしまして、そういったことについての、いわばフォローをどうするかということのある程度の枠は出しておかなければいけないかなという気はするんです。そのあたりをまとめて、いわゆる施策のほうからすると、こういった枠である程度考えているというのを出しておいたほうがやっぱりいいかなという気はします。

○伊理会長　そういうコンサルティングは大事なんだから、それに対して何かしらの手当てを下さいということを強調したいですね。

○　そうですね。先ほどおっしゃいましたけれども、東京都の晴海総合高校の場合には今キャリアカウンセラーでしたっけ、一人先生で置いていらっしゃるんですよ。たしか先生のほうでほとんど授業を持たないでやっていらっしゃるという形で置いていらっしゃると思うんですけども、それが今お話に出てきたように、ドイツなどは完全にそれを労働省系列のほうでやることになっているんですよ。そういった形の人を学校に配属するなり、あるいは幾つかの学校をまとめた機関みたいなところに置いてもいいわけですし、そういった形でのアドバイザーみたいなものも、こういった形でやるという、1つじゃなくていいと思うんですけど、幾つかのプランとして、こういった形のもので考えられるみたいなことをどこかに入れておいたほうがやはりよいかないかなという気がします。

○伊理会長　それから、インターンとデュアルシステムについてはちょっと議論をさせていただきましたけれども、用語です。パートナーシップについては、さっきもおっしゃられたように、非常に法律的にがっちりしたパートナーシップの話じゃなくて、これはそれこそ日本語で置きかえてもいいような……。

○　共同ですか、共働、共業とか。

○伊理会長　というようなものだと思いますが。

○　共同までいかないんじゃないですか。連携と協力ぐらいですかね、おそらく。

○　何か適当に……。強力なとか、やっぱり強力なって入れてもらわなければいかんね。単に今まで連携と協力と、何でも連携、連携で、すごいもう、やらないと、何でも連携ですよ、今。

○　すいません。きょう初めてなんですけど、ちょっとこの辺が必要なんじゃないかなということで、1年次に職業観とか勤労観を育成となっていますけれども、その前に私ども職業訓練施設、

何万名というわけですが、就職する企業さんからのお話を聞いてみますと、必ずマナーですね。社会人教育をやってくれと。うちの場合は中学卒業、高校卒業、大学卒といろいろな人がいます。共通して言われるのは、会社員になった場合にあいさつ一つできないと。電話もとれないと。それから、言われたことに「はい」という返事もできないと。

○伊理会長 大変失礼なんですけれど、何回か前にそのことについてはかなり議論がございました。

○ そうですか。それから、安全についてはこれはもう不可欠といいますか。これがもし教育されていないと、服装から、それから歩き方から、これはもう何回も強調してよろしいと思います。石川委員がおっしゃっていたように、これはもう欠かせないのかなというふうに。

○伊理会長 おっしゃったことは安全教育ともう1つ、自己表現能力、それからコミュニケーション能力、それとも関連する話なんですよ。そういったマナーの話は。

○ ですから、言葉遣いが、この間もある大学生との、育英会の関係の選考委員をやった。すごいですよ。もう、敬語知らないですから。「じゃないすかあ」とかね。

○ 今いただいたような課題というのが、おそらく事務局さんのほうからしますと、1年目のところの学校設定科目のところの「働くことと生きること」の中身でやらなきゃいけないこととして、おそらく想定されているんだと思うんですね。だから、その中身がある程度こんなことをイメージしているというのが、ちょっとここに補足されると、おそらく先生方のほうの考え方にも非常に近くなるんじゃないかなという気がするんですけどね。

○ 例示というか、明示しておいたほうが良いと思うんですよ。こういうことを重視して送りますよと。生徒さんが嫌になる前に、受け入れた企業がもう嫌だと。もう二度と、と、そうなる可能性もありますのでね。

○伊理会長 それが嫌だというと、だれも受け入れられなくなっちゃうというのが実態であるのが困ったことだという話なんだと思うんですけど。

ぜひ書いておくといいですね。

○ ばらつきはありますよ。やっぱりもうすごい悪い人と、曲がりなりにも相談に行ったら一生懸命敬語を使ってやっている人と。普段は仲間じゃそういう言葉を使っていないでしょうけれど。

○事務局 今のルールとか、社会人のマナーで、16ページのところに、一番最後に、育成するためにまずこれこれとというところで、学校設定科目だけではなくて、それは主にやりながらいわゆるインターンシップ、就業体験でも行っていくということはある程度ここには示されているなと思います。

○伊理会長 ただ、今いただいたご意見のように、そういうキーコンセプトなんかを明示的にちょこちょこっと含めていただけると、より具体的でわかりやすくいいんじゃないかなという、そういうお話だったんじゃないかと思いますので。

○事務局 まだつけ加えてちょっとよろしいでしょうか。

パートナーシップという文言についてなんですが、これは教育課程審議会の答申の中で、平成10年の中で、協力関係という言葉の括弧つきでパートナーシップと出ていますので、そういう意味ではある程度認知されつつある言葉かなと思っています。

○伊理会長 じゃあ、ここでもどちらを括弧の中に入れるかはともかくとして、パラフレーズしておけばよろしいんですね。

○事務局 そうですね。一文そういうことをパートナーシップと称しますというようなものがあれば、あとは妥当かなと思います。

○ その前に、強いと書いてください。

○伊理会長 強い、協力関係。

○ 強力なパートナーシップ。そうしないと。

○ すみません。あと、全体の構成のところちょっと気になるのが、今、16ページの(5)教育課程のところずっと書いてありまして、①②ということで、いわゆる中学校の新卒者と、あと②、18ページになりますけれども、勤労青少年として入学する者の場合という形で分けてあるんですが、内容が必ずしもそれぞれに対応して分かれているわけではないような気がするんですね。特に②のほうで書いてある中身のことは、おそらく①のほうの中卒者のほうにもかかわることが書いてあるのではないかなと読めると思うんです。そのあたりをちょっと区別してわかるような形で書いておいていただいたほうがよいのかなという気はします。要するに、入口2つありますよということはわかるんですけれども、じゃあ、ここで書いてあることはどっちなのというのが、ここではちょっとわかりづらいので、それを整理していただければなというふうに思います。

○伊理会長 もっとご工夫をいただければということかと思いますが、あまりはっきりと分けちゃって、どっちかじゃないといかんというのもまた後でやりにくくなるから。

○ なので、②のほうの勤労青少年として入学する者の場合というのは、こういった場合もあるんだぐらいで、端的に言えばいいわけですよ。

○伊理会長 ですから、先ほど石川さんのほうからもご指摘ありましたように、典型的な例としてこういう形があるというような書き方にしていただければ、実情に応じてケース・バイ・ケースでまた対応もできる。また、ケース・バイ・ケースじゃ困るというご意見もあるいはあるかもしれませんが、とにかく典型的な例としてこんなものがあるという書き方の

ほうが。

○ 実際やってて、ゼロじゃないんですよね。やはり、午前中やって、仕事によっては月、火は、あした、あさっては午前中必ず来てくださいと。それからあと水、木、金は午後に来てくれとかね。それから月、火は1日いてくれと、ピークだから。あと、水、木、金は午前中でいいよとか、いろいろなバリエーションあると思うんです、仕事の内容によって。それをばちっと決められちゃうと使い勝手が悪いとか、そんなことを言われて嫌われちゃう。

○伊理会長 そうですね。とはいいいながらも、どこかに書いてありましたように、クラスがほんとうにてんでんばらばらになっちゃうと、学級としての一体性がなくなってしまうから、その辺は企業のほうとの話し合いでいろいろとやらなきゃいけない。

○ だからそれが、学生のくせにある程度夏休みとるんですよね。

○伊理会長 やっぱりホームルームの時間のようなものは、ちゃんと共通にとれていないと。

○ 建築科を卒業した連中は大体夏、特に技術屋さんだったらもう1カ月ぐらいびちっと。それだと使えるんですよね。

○ 本校ではことし実験的に行っているんですけども、やっぱり生徒の学校での生活がありまして、なかなか難しいんですよ。ですから、今やっているのは、派遣と学校での授業をパラにして、どちらを選ぶという形にしているんですね。だから、それは例えば実習ですとか、課題研究という科目がありまして、それを企業派遣実習とパラでどちらをとりますかという形で実施しています。そうしませんと、カリキュラムは組めないですね。

○ そうですね。それもわかります。

○ それと、年間通してやった場合には、いろいろな学校行事等がありますと、そこで生徒同士の人間関係の結びつきが強くなるものですから、そういう形でやらないと生徒が不安を感じます。なかなか難しいと思うので、この場合に1学級そっくりがすべて提携となると、いろいろなパターンが入ったときに、果たして学校で授業時間が組めるかということで、実施上ではなかなか難しいところがあるかと思いますけれども。

○伊理会長 そうでしょうね。

○ ええ。ですから、その辺は柔軟に対応していけるような表現がよろしいんじゃないでしょうか。

○ ちょっとよろしいですか。視点が違うんですが、9ページに職業教育云々と、「高度なものづくり基盤技術が危機的な状況にあり」と表現されているんですけども、このデュアルシステムを採用したからといってこの危機的云々が変わるわけでもないし、これをやられますと、若者のものづくり離れがどんどん加速しちゃうんです。こういう表現はあまり——我々困っちゃいますので。ものづくりを若者に教育している人間として。もう少しトーンを。

今が底で、これから上がるとか、そういう周期性があるとか、いろいろな表現があると思うんです。どんどんこれだと若者が職業教育をやらなくなると思うんですよね。工業高校に行かなくなっちゃうんじゃないかなんて。表現だけの問題です。

○ 逆に言いますと、我が国の製造を今後とも将来とも支えていくのは、高度なものづくりの基礎技術なんですよ。裏を返せば。

○ これからも続くはずなんです。

○ その高度な、先端的な高度なものづくり技術がないと、日本の製造業の存在価値がなくなってきちゃうんですよね。

○ でも、デュアルシステムまで結びつきませんよ。

○ いや、だから危機的な状況というのは外すというのは、裏を返せば、我が国の製造技術を支えてきた高度なものづくり基礎技術を、これを維持していかなければいけないわけですね。

○ それだったら、はい。表現だけなんです。

○伊理会長 そうですね。ネガティブなほうを強調するのか、それを脱却するためにどうポジティブにしなきゃいかんかということを強調して書くか、確かに後者のほうがいいでしょうが。

○ いや、でも、ほんとうに危機的な状況という認識で、いろいろな活字出して、我々サイドもそう思って継承政策をどうするかということで、特別ここに力を入れて行政側はいかないと、これは脱却できませんよという、非常に厳しい認識を訴えて我々としてはいるんですが。

○伊理会長 吉川さんのおっしゃったのは、そういうことを言えば言うほど若い連中は逃げちゃうという。

○ 大人にはいいんです。大人にはいいんですが、子供に言うときは違う表現されないと、同じことを言っていたらもうとんでもないことになってきまして。

○伊理会長 そんなに危機的な状態にあり、みんながやらないんじゃおれもやらないと。

○ 大人に言う言葉なんじゃないですか、これは。担当、関係者に対する。

○ でも、これ、デュアルシステム、高校生とか見るんじゃないんですか。見ないんですか。見ないんだったらいいんですが。こういう文章が抜かれてどこかで生きていくという。

○事務局 それは、全体的に、これは基本的にオープンにしますけれども、対象はやっぱり基本的にはこれを具体化するためのこれからの先の道筋を示すものですから、高校生、中学生、オープンにはしますけれども、基本的には行政なり産業界の方なり教育界の方に見ていただくというところが中心になると思います。

○伊理会長 いや、それはもういいんですけれどね。ですから表現としては困った、困ったと書くのではなくて、困った状態をこうやって脱却したいという、それでそれが日本のためになるんだということのほうを強調しましょうということなので。

○ 現実に私どもにいろいろな有名な方が、著名な方が講演に来られて学生に聞かせますときに、こういう表現をされると学生はこっそりと言います、じゃあ、我々どうしたらいいんだよとか。だから、こういう表現は使ってもらっては困るんですね、ほんとうは。そういう趣旨で言いたいだけで。

○ すいません。今のところに関連して言いますと、Iの職業教育の現状と課題のところは、おそらく委員の先生方がお考えになっていらっしゃるところは、高校、大学、大学院全部含めた形での職業教育を考えていらっしゃると思うんですけれども、おそらくここでの趣旨は高校での職業教育という形になるかと思うんです。何度も議論しているところで、ちょっと軸がずれていますよということが出ているわけですが、その部分がある程度分けて読めるような形にするということに、やっぱりもう一度努力が要るのかなという気がするんですね。

その中で特に、例えば1の(2)の専門高校の状況のところとか、あと、(3)の高校卒業後の状況というところで、いわゆるこのデュアルシステムに関係する専門高校の状況、これだからこれをするんだという形のことか、びしっと何となく出ていないような気がするんですね。それは、いわゆる普通高校に行く流れがまず多いということは、それでわかるんですけれども、その後に、じゃあ専門高校はどうなのかという形で、例えば中退率が高いということだけは書かれているんですけれども、あと、その後の進路が実際に就職に向いているかどうかとか、あと、フリーターがどうなのかとか、むしろ専門高校の中での課題みたいなことは、もうちょっときっちり書いたほうがいいのではないのかなという気がするんですね。

その中で、じゃあ専門高校を魅力あるものにするための1つの方途として、デュアルシステムが必要なんだという説明の仕方になるのが多分Iだと思うんですよ。したがって、Iのところでは、今申し上げたような筋で、話が読めるような形で組まないと、あまりあちらこちらに行っていますと話が広がってしまいますから、そこに絞っていく形でむしろ書きかえられたほうがいいんじゃないかなという気はいたします。

○伊理会長 今のご趣旨はよろしいですね。Iのところも最終的には、だからデュアルシステムを導入するんだというところに絞れるように。

○ そうですね。2のところは特にあちこち飛んでいますので、そのところが、だからデュアルシステムみたいな形での魅力ある専門高校づくりが必要なんだという形にならなければいけないんじゃないでしょうか。

○伊理会長 一番最後のところはもう、実践に向けての課題のところは、これはもう八方破れだから、家庭があっても何があっても構わない。これはそれでいいんだけど、そうじゃないところはデュアルシステムへ流れが絞れるようにしよう。

○ 特にこの2番の職業教育における課題の9ページの部分は、いわゆる現在の専門高校にお

ける職業教育上の課題みたいなことが、本来的には並ぶのが筋かなという気がするんです。

そうすると、Ⅱのところ、じゃあどうしましょうかという具体的な中身のほうのプランのほうに入るといふ流れじゃないかと思ひます。

○伊理会長 いろいろありがとうございます。

それからもう1つ、ごく事務的な話といえは事務的な話なんですけれど、いろいろな資料の引用がござひますけれども、できればそれぞれ、意識調査何年度と書いてあるのもあるけれど、何年のかがわからないのもところどころにあるので、日付がわかるものは入れておいたらいひんじゃないですかね。

○ 図のところは全部出典が抜けていますので、それを入れるということと、あと、円グラフで書かれるところの全体数が全部抜けていますね。これはやっぱりある程度読まれる方、資料まで全部丁寧に読んでくださればいひんですけれども、そうじゃない方も多ひですから、できれば全体数でなんぼでそのうちでこうですという形のことがわかるような形でお書きになったほうがいひと思ひます。

○伊理会長 資料は、これ、全部はついていないんですね、今は。諮問事項だけがついていて。審議経過ももちろんついてないし。

○事務局 アンケート調査については、中身的に同じなものですから、省かせていただきました。

○伊理会長 実物にはつくわけですね。最後で。

○事務局 はい。

○伊理会長 諮問だけついていひる。

それで、予定の時間をかなり過ぎてしまったんですが、これだけちゃんと答申の体をなした案が出てきますと、ご意見のほうもそれに従ってより具体的にたくさんちょうだいできることになりまして、これで議論が終わりというわけじゃありませんが、ありがとうございます。

かなりこれで問題点といひるか、もっとこうしたらよからうという改良点のご指摘など、たくさんいただけたと思ひます。

さて、これでご意見を締め切るわけじゃありませんけれども、今までのいろいろなご指摘、それからそれに関するディスカッションを踏まえて事務局側としてはどんなふうにかこれがまとめられそうかについてちょっと。したがって、どういひう日程でやればよろしいかについても。

○事務局 ただいまかなりいろいろとご意見いただきまして、20項目ほどあるかなとも思ひますが、今、ご議論もいただきましたので、その内容につきまして後ほど整理をいたしまして案をまとめたいと思ひます。

また、本日時間が短かったので、もう少しご意見おありかなと思ひますので、ある場合は8

月2日ぐらいまでに、大変恐縮ですがファクスですとかメールでお送りいただければと思います。それを踏まえまして、その後2週間ほどで各委員のほうに手直しの案を送らせていただきたいと考えております。

○伊理会長 きょうの論点整理と、それに対してこういう対応をとりたいという、一応これも素案でいいと思いますけれど、メモ書きしたようなものと、いつまでにより詳しいものはくれというのと、一括して皆さんにお送りするというのは間に合いませんか。

○事務局 では、その時期に。

○伊理会長 それをまずやって。

○事務局 その通知のときに、お知らせのときに、日程についてはお示しさせていただきたいと思います。

それを踏まえまして、最終的には会長、副会長にご審議をいただいてまとめさせていただければと思っております。

○伊理会長 それで、今、日程調整表というのは、これは最終日の話ですね。

○事務局 ええ。これは先ほど申し上げたように、9月のこの期間中ぐらいに最終審議会を開きたいと思っておりますので、ご都合をここにありますように、7月31日、大変恐縮ですが、あさってぐらいまでにファクスいただければと思っております。

○伊理会長 この9月の日はもうセレモニー以上のことはできませんね。

○事務局 ええ。基本的にはそういう形で。

○伊理会長 教育長に提出する答申案が完成していないといけない。そこでこれに異議があると言われても……。

だから、それまでの間にメール——広い意味でのメールで。

○ 1つだけ統計的におかしいのが、12ページの図9の「興味ある」が25%、「どちらともいえない」が41%、「興味がない」が34%で、「どちらともいえない」を足しちゃって3分の2に達しているというのは、逆に言ったら興味がないという人も75%いるということなんです。だから、これはもう……。

○伊理会長 要するに、デュアルシステムが何であるかが、あまりよくわかっていただけていないということ。

○ 何かこれで3分の2に達していると言い切っちゃうと、統計の先生は全然統計のこと……。

○事務局 わかりました。

○ 何か表現変えたほうがいい。

○伊理会長 前は農業、商業の話もかなり出ていたんですけど、何かほかの議論が沸騰しちゃいましたので、どうも失礼しました。いくらかご意見踏まえて、オープンエンデッドにし



である。

○ ものづくりって言い切っちゃっているから、主として工業ですよ。商業ではものづくり……。

○伊理会長 ええ。そういう議論を前回いたしまして、これは基本的には諮問を狭い意味に理解して、答申案をつくったんだけど、こういう趣旨であれば、他の商業や農業についても、何て言うのかな、英語で言うとモタービス、モタービスと言うんですけど、適当な変更を加えた上で適用可能であろうというようなニュアンスで書きましようということになって、大体そういうふうになってきているとは思いますが。

○ うちの会社のすぐそば、芝商さんが同じご近所様なんだけれど、熱心にやっていますよ、ほんとうに。

○伊理会長 そういうところのいろいろな実情も勉強しながらまとめる余裕があればよかったですね。

○ みんなそれぞれ一生懸命やっているんでしょうけどね。

やっぱり身近に話を聞いて、ほんとうに我が子のように一生懸命先生方やっていらっしやうて。

○伊理会長 しかし、さっきもちょっと申し上げましたように、やはりこういう形になると議論もより具体的にしていだけるようになりますね。ですけども、私も学生なんかにもよく言うんですけども、とにかく一たんレポートを書け、実験をしろ。それがまとまったところでもう一回全部やり直すというのがほんとうなんだと。したがってこの答申を1回出そうとしたところでもう一度引っ込めて、また同じぐらいの時間をかけてやると、よりいいものになると思うんですけども、なかなかそうはいかないところがある。

さて、一応先ほど事務局のほうからのご説明がございましたような日程で努力してみたいと思いますので、ひとつ今後ともよろしく願いいたします。

本日の会合としては、これで一応終わりにして、その後は実質的に電子メールでも、ファクスでも、それから普通の郵便でも、何で来るか知りませんが、そういうもので随時事務局側が中心になって、ひとつご意見を集約して、最終的にはまたひとつよろしく願います。

そういうことで、9月の、いつになるかまだわかりませんが、その日に向けて何とか答申をまとめたいと存じますので、よろしくご協力くださいませ。

本日はどうもありがとうございました。

— 了 —